河北新報

平成１８年（2006年）９月１０日（日曜日）

仙台・茂庭浄水場

浄水泥土 花壇に変身

「新たな活用法に」

浄水場のろ過池などで発生する「浄水泥土」をリサイクルした花壇が、仙台市水道局の茂庭浄水場（太白区）にお目見えした。屋上緑化用の植生基盤材の開発に取り組む東北大大学院環境科学研究科の高橋弘教授（エネルギー環境学）が、応用研究の一環として泥土の提供を受けて設置した。

高橋教授は建設現場の汚泥に古紙などを混ぜ、盛り土に再資源化する工法を三年前に共同開発。財団法人国土技術研究センターの助成を受け、改良土を植生に適した状態にするため、通気性や保水力を検証している。

一つの大きさが縦一メートル、横三メートルで、浄水場見学コースの屋外通路に三つ並ぶ。浄水泥土を改良した土は計一・五立方メートルを使用、キキョウ、ツワブキなど八種類の草花を植えた。花壇ごとに改良土と肥料の混合比を変え、植生状況を観察するという。

六日に完成した花壇は

茂庭浄水場では年間二千立方メートルの泥土が排出され、敷地内の最終処分場は今後三年ほどで埋まる見込み。本年度は全量をセメント原材料に再利用する計画で、浄水場は「泥土を有効活用する選択肢が増えてほしい」と研究成果に期待する。

浄水場の見学者は小学生を中心に年間五千人に上り、高橋教授は「花壇を見た子どもたちが、循環型社会に関心を持つようになってもらいたい」と話している。

浄水泥土をリサイクルした花壇について説明する高橋教授＝仙台市太白区の茂庭浄水場